

3・11 後を生きる

氷河期 2万年以上先



太陽の黒点が最近、減少し、百年ぶりの不活発な状態だといふ。「氷河時代がやってくる」「寒冷化は温暖化よりも「こわい」という説も聞く。本当に氷河期に突入したら、人類はどうなるのだろうか。

◇ 二、三数十万年の間、地球は、氷期と間氷期を繰り返してきた。およそ十万年おきに氷期が訪れ、数万年続く。その間は温暖な間氷期だ。現在は約一万二千年前に氷期が終わった後の間氷期にあたる。氷期が終わってから、人類は農耕を始め、文明を築いた。

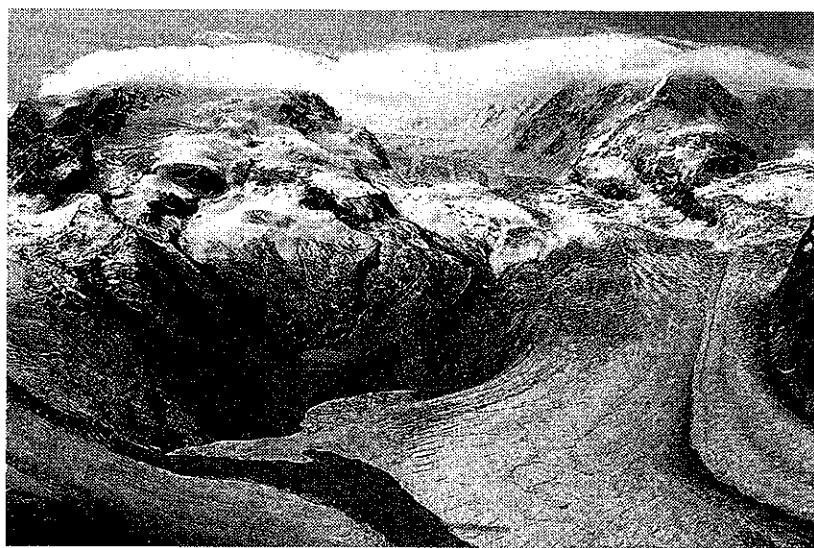
最近、南極の氷床データをはじめ、世界各地の過去の気温データが集まってきた。氷期と間氷期とは五〜六度の気温の差がある。氷期が終わると、突然気温が急上昇すること、うかがえる。

もし氷期が来たらどうなるか。五度、気温が低下すると東京や名古屋は札幌並みの気温になる。

世界規模では、大陸に氷河が発達し、海面は下がる。前の氷期には海面が最大百二十センチも低下した。日本列島と朝鮮半島・樺太・シベリアが陸続きとなり、日本海は湖だった。シベリアとアラスカの間に地続きとなり、アメリカ先住民の祖先が、北米大陸へと渡っていった。

| 地球寒冷化 | |
|--------------|------------------|
| 前の氷期と同じ低温を想定 | |
| 被害推定 | 人類の生存は可能 |
| 発生時期 | 2万〜5万年後 |
| 予見可能性 | 必ず訪れる |
| 対処可能性 | ゆっくり進むので対応策はありそう |

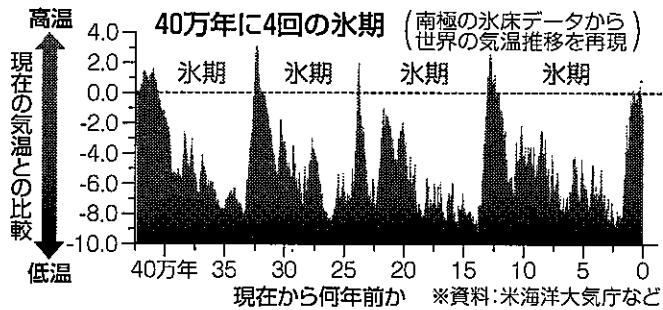
数百年の寒冷期 再来も



スイス・アルプスの氷河。こんな景色が日本でも見られる。―桑林直司撮影

降水量は全体的に少なくなるけれども、中には増える地域もあり、森林や砂漠の分布は現在とはかなり違った様子になりそうだ。

■原因は日射量の変動
「次の氷期の到来は、二万年から五万年先でしょう」



と、東京大気海洋研究所の阿部彩子准教授は言う。「それまでは現在のような気温が高い時代、つまり間氷期が続く。その後、一万年に一度といったゆっくりしたペースで気温が下がっていく。とはいっても、常にかんがりの上下動があります」

氷期と間氷期をもたらす主因は、ミランコビッチ・サイクルといって、地球の公転軌道などが微妙に変わることによる日射量の変動だと考えられている。日射量が減れば、地球は寒くなる。この動きを人間が操作することはできない。氷期の到来は避けられない。しかし数年先、数十年先に来ることはないのだ。人類は数万年続くであろう氷期を生き延びることができらるだろうか。

「前の氷期では、ヨーロッパでホモ・サピエンスが生き

延び、ネアンデルタール人は滅亡しました。適応力の差が明暗を分けたのかもかもしれません。先祖ができたのですから、将来の人類も大丈夫でしょう」と阿部さん。「ただ高度な文明がその時まで続いているかは分からないし、現代のような生活が維持できるかは疑問ですが」とも。

■雨量変わり農業影響
氷期と間氷期より、もっと周期の短い温暖のサイクルもある。十七世紀後半から十八世紀前半を中心とした数百年は寒かったようだ。ロンドンではテムズ川が厚く氷結し、日本でも凶作に見舞われた。こうした数百年の短い寒冷期は、小氷期ともいわれる。

名古屋大太陽地球環境研究所の草野完也教授は「原因は主に太陽活動の変化だと考えられます。平均気温では〇・八度くらいの低下だけでも、地域や季節によってはもっと気温が下がったかもしれない」と話す。

「最近の太陽活動をみると将来、小氷期が再び訪れる可能性はあります。そうなったら、気温だけでなく、日照や雨量も変わる。江戸時代の飢饉が再来することはないでしょうが、ぎりぎり農業を営めるような気候の地域は打撃を受けるのでは」と、草野さんは予測する。

地球温暖化のペースは過去百年で〇・七度。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、今後さらにハイペースで温暖化が進むと予測している。緩やかな温暖化なら、小氷期のマイナスとちょうど同じくらいで都合がいい。ただそんなシナリオが実現するかどうかは、誰にも分からない。(吉田薫)